

C0095 P1600E

定価1600円(本体1553円)



9784487754472



1910095016000

一谷川彰英編

矢口 高雄
里中 満智子
永井 豪



東京書籍

矢口高雄

[illegible]

里中満智子



永井豪

[illegible]

近未来の表現者

馬居 政幸

二つの評価

マンガ作家である永井豪さんとその作品について語られるとき、次の二つの観点から評価される場合が多いと思います。

その一つは、いうまでもなく、「ハレンチ学園革命」とまで評された、『ハレンチ学園』の作者としての永井豪さんに対して与えられた、「エロスの解放者」という観点からの評価です。さらに、この観点は、『キツカイくん』、『あばしり一家』、『けっこう仮面』などの作品を通じて、ちょっとエッチで楽しい絵とストーリーで彩られたギャグマンガを描く作家、という評価に結びついていると思います。

もう一つは、『鬼』、『魔王ダンテ』、『デビルマン』、『バイオレンスジャック』、あるいは

『黒の騎士』、『手天童子』、『凄ノ王』などの作者としての永井豪さんを評価する際の観点です。それは宇宙大の世界を舞台に、時間と空間を超えて自在に活躍するヒーローをリアルかつ劇的に描く「SFマンガ作家」という観点です。この面では、かなり硬派の作家として、高い評価が与えられていると思います。

この二つの評価をつなぐ位置に、『マジンガーZ』、『グレンダイザー』、『グレートマジンガー』、『ゲッターロボ』などのロボットものアニメや、『キューティーハニー』などのセクシーで可愛い女の子（女性）が活躍するアニメ作品があるように思えます。

しかし、私は、今回、本稿を執筆するにあたって、改めて、永井さんの作品や永井さん自身のマンガ論を読み返してみました。また、手元にある主要な永井豪論（作品論）を比較してみました。その結果、このような二つの観点からの評価によって、マンガ作家永井豪とその作品について語ることに、次のような疑問を抱くようになりました。

まず、彼の名を日本中の人たちが知ることになった『ハレンチ学園』という作品に対するこれまでの評価への疑問です。それは彼を「エロスの解放者」、あるいはその裏返しとしての「エッチなギャグマンガ作家」として位置づけることへの疑問でもあります。

さらにこの疑問は、「エロスの解放者」、「ギャグマンガ作家」、「SFマンガ作家」、いずれにせよ、これまでの永井さんとその作品にはられてきた評価のラベルによって、永井さんが

創造する世界を位置づけること自体への疑問視にまで広がっていました。

そして、私のこのような疑いに拍車をかけたのが、昨年（一九九四）、永井さんが出版した二種類のマンガの世界の評価にとまどったことです。一つは、酒天童子説話の主人公のモデルを、永井さん自身が探索する過程を描いた『闇の宴^{やみのうたげ}』、もう一つは、ヨーロッパのキリスト教文化の古典に挑んだ『ダンテ神曲 地獄編 上下』です。この二つの作品は、いずれも、私のような大学の研究者と比較しても、勝るとも劣らない実証的方法と、マンガ作家としての研ぎ澄まされた想像力と創造力が、見事に一体化することにより、重厚かつ多元的に表現された世界で満たされていました。その意味で、私は、ギャグでもエロスでもSFでもない、「永井豪独自の知的世界の表現」としか評することができませんでした。

そこで、このような私自身のとまどいと疑問にこだわることから、私なりの永井豪論を提起してみたいと思います。

教師の本性を暴く

まず最初の疑問は『ハレンチ学園』に対するこれまでの評価に対するものです。



「ダンテ神曲」より

確かに、否定するか肯定するかは別として、多くの永井豪論が指摘するように、日本のマンガ史において、『ハレンチ学園』が、子どもたちの世界における性表現の解放を促した記念碑的作品であることは事実です。その意味で、永井さんを「エロスの解放者」として評価すること自体は間違っていないと思います。

しかし、それはあくまで、結果論にすぎないと考えます。その理由は、執筆当初から、永井さんが「性表現のタブーに挑戦する」ということを目的に、『ハレンチ学園』を描いたとは、とても思えないからです。むしろ、永井さんの意図は別のところにあったと考えます。

次の四枚のマンガを読んでみてください。『ハレンチ学園』の第一回「新入生の巻」の最初の四ページです。（徳間コミック文庫版『ハレンチ学園』①）

「ホホホホ なかなか りっぱな学校 ざますわね」

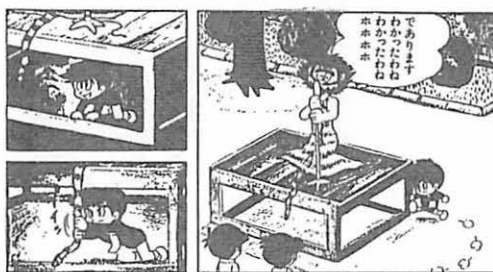
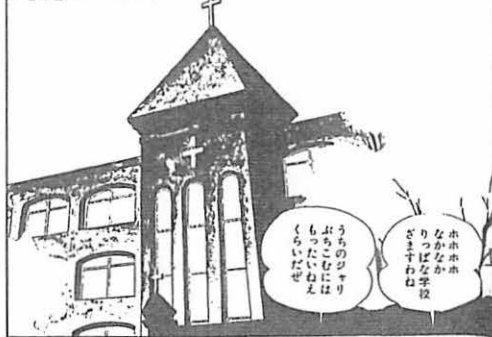
「うちのジャリ ぶちこむには もったいねえ くらいだぜ」

「ガキ 良かったか これから この学校に かようんだぞ」

「ホホホ 山岸さん 元気な お子さま ざますわね」

これが冒頭の二つの「コマ」の「吹き出し」に書き込まれた文字です。言葉の粗雑さに驚くようでは永井さんの世界の価値を理解できないでしょう。私は、丁寧な挨拶言葉の背後に

新入生の巻



ある学校に対する親の本音と、それに抵抗する子どもの本音が、見事に表現されたセリフと考えます。

次に、三ページ目と四ページ目を見てください。

ユニークというよりは奇怪な三人の先生を代表して挨拶する吉永先生（ヒゲゴジラ）。彼の話を全く聞かずに勝手にふるまう子どもたち。その奇怪な先生を「ハンサム」とほめる母親。吉永先生（ヒゲゴジラ）を挨拶台から引き落とす山岸。

この四ページから、当初の永井さんの『ハレンチ学園』に込めた意図（刃の矛先？）が「エロス」ではなく、「学校の教師」と「親」であること。そしてそれを、「子ども」の側からの意義申し立て（反抗あるいは攻撃？）という視点から、表現しようとしたことが理解できると思います。

実際に、この「新入生の巻」の次のページでは、母親が帰ったあと、

「やい！ てめえら さつきは よくも やったわね ホホホホ」

「おれたちゃんゝ 父兄が いるから おとなしく してたんだゝ わかったか！」

「ハレンチ学園は そちらこちらの 学校とは ちがうばい ちがうばい」

と、子どもたちを脅し体罰を加える教師に対して、山岸が抵抗する場面に転換します。そして、最後は、逆に教師を攻撃して勝利した山岸を胸上げする絵で終わっています。

これと同様に、第二回「授業参観日の巻」、第三回「トイレット作戦」、第四回「逆襲ヒゲゴジラの巻」は、いずれも子どもたちによる教師への攻撃、とりわけ「ヒゲゴジラ・イジメ」がストーリーの主旋律です。それに対して、エッチな場面はほんのわずか、それも言葉遊びが中心で、女性の裸の絵は皆無です。

ところで、ハレンチ学園の名とともに語られるのがスカートめくりの流行ですが、そのシーンが登場するのは、実は非常に遅くて、二十二回目の「モーレッツごっこ巻」です。ハレンチ学園の第一部は、全部で四十六回ですから、連載の真ん中あたりで登場したわけです。さらに、一コマ目の絵は、この題名が示すように、山岸が「おう モーレッツ」と微笑む小川ローザのテレビのコマーシャルを見ている姿です。

スカートめくりは、永井さんの特許でもなければ、『ハレンチ学園』の中心テーマでもなかったわけです。それがなぜ、『ハレンチ学園』↓「スカートめくり」↓「エロスの解放者」というラベルが永井さんに貼られるようになったのでしょうか。

十兵衛のスカートをまくらせたのは誰か

当時の状況について永井さんは次のように述べています。少し長くて恐縮ですが、永井さんのマンガを理解する上で、重要なポイントが語られていますので紹介します。

「昭和四十三年、新しい雑誌『少年ジャンプ』が集英社から創刊されることになりました。ほくも新人だし、出版社の方も、新しい雑誌だからとにかく試してなんでも好きなものを作ってほしいと言ってくれました。

そのころは時代もののギャグもけっこう描いていたんですけど、違う路線にして現代ものとか学園ものはできないかと言われて、学園ものをやってみようということになりました。まともなものをやってもつまらないし、編集部を担当の人とあれこれ相談していたら、当時の映画の宣伝に破廉恥なボルノ映画というあおり文句をみつけたんです。破廉恥を漢字で読むとひどく恥ずかしいのですが、片仮名で「ハレンチ」にすると変な語感があってもいい。

それを雑誌のタイトルにつけてみたら、とんでもないものになるかもしれない。漢字を片仮名に直した方が、軽いノリみたいなものが出るんじゃないかということになって、『ハレンチ学園』というタイトルをつけてみたんです。

読者の反響はすぐくて、雑誌の八割ぐらいの人気を独占したんです。いままでのギャグ漫画にない斬新さが受けたのでしょう。しかし、女の子をちょっと色っぽくしたり、水着を描くだけでも、大人たちから何だかんだと目くじらを立てられてしまいました。

ほくは女の子を明るく描いたつもりなのに、水着の場面とか、そういうことだけを大人は騒ぐ。子供が喜ぶから素直に描いたんで、最初からそういうものをねらっていたわけではないのです。

ほくの学生のとときの経験では、表向きだけ格好つけている先生がけっこういたんです。だから、学校の先生の本性はこんなものではないかということで、原始人のかっこうをした「ヒゲゴジラ先生」みたいなキャラクターを思いついたんです。そっちの方がねらいだったんですが、大人たちはそのへんのところはあまり指摘しないんです。

漫画はカリカチュア（風刺画）ですから、それを大げさにデフォルメ（変形）して描いたらおもしろいということから始まっているんです。中学生や高校生の間の「性」に対する関心や問題をオーバーに描いたら、大反響になったわけです。

「スカートめくり」を非難されましたが、CMの小川ローザの「Oh! モーレッツ」を漫画の中にアレンジして一回取り入れただけなんです。そうしたらスカートめくりの張本人みたいに言われました。PTAの人たちは内容はよく読んでいないのに、裸が出てきたとか、何だかんだとめっちゃくちなことを言われました。」（永井豪『漫画家』実業之日本社）

『ハレンチ学園』のハレンチとは、その由来はボルノにあるものの、新人作家が獲得したチャンスをもつるために「軽いノリ」でつけた名称、というのが真相。「エロスの解放」という大それた目的のためではなかったようです。永井さんのこの作品にかけた思いは、やはり先に指摘したように、「学校の先生の本性」を暴くことでした。

しかし、このような意図は無視され、ハレンチやスカートめくりという言葉のみが、それも永井さんのマンガというよりも、当時の大人が抱いていたイメージにしたがって、問題視され、永井さんと集英社は非難の渦に巻き込まれます。その騒動の様子については、当時、渦の真ん中において、永井さんを支持する論陣をはった、ガバゴンこと阿部進先生が、本書で紹介されていますので、参考にして下さい。（本書二七ページ）

ここでの問題は、このような非難に対する永井さんの対処の仕方です。先に紹介した文に続いて、永井さんは次のように当時をふりかえっています。

「子供たちが性に関する大人向きの本を隠れてみている。そっちの方が問題じゃないか。子供には子供なりの「性」があるはずだ。それを堂々と漫画に描いて、それを子供が見て発散されれば、むしろ健全だと思っただんです。」

さらに、自分のマンガに託す思いを、次のように述べています。

「ふだんがんじがらめの子供たちの心を解放することに主眼をおいているから、ばかばかしいことでもあえて描いている。そうしないと、子供たちは息が詰まって精神的におかしくなっちゃう。実際おかしくなりかけている子供が増えてきているから、子供をどこかで解放してあげなければいけない。そのために僕は漫画を描いているのです。子供たちがおかれている現状や子供たちをめぐる諸問題を理解せずに、漫画だけを俗悪だとか、悪い影響を与えるとか非難するのはおかしいじゃないかと——」。

改めて、先に紹介した『ハレンチ学園』第一回の冒頭の会話を読みなおしてください。親として、子どもとして、一度は、誰もが思った言葉ではないでしょうか。

永井さんが『ハレンチ学園』で描こうとしたのは、エロスの解放ではなく、子どもたちの世界を子どもに代わって表現することであつたと考えます。その子どもたちの世界の一つに、「性」への興味があつたにすぎない、ということだと思っています。

永井さんは自分の創作方法について次のように述べています。

「僕はいつも作品を描くとき、僕が描いているのではなくて、何か見えない力によって描かされているという気がしています：中略：『人々の願望の集合体』というか、『時代に描かされている』とでもいいましょうか、ある時代を共有しているたくさんの人が、漠然と『こんなものを読みたい』と思っているとしますと、僕がそのたくさんの人達の無意識をキャッチして、マンガという形のあるものに表現しているのではと思うのです。ユングが言っていた、人類の集合的無意識のようなものことです。」(本書一七五ページ)

このような永井さんの自己分析に基づくなら、「エロスの解放者」という評価の原因となる一連の作品は、『ハレンチ学園』連載過程において沸き起こったさまざまな論議(非難)の渦中にあつて、永井豪という作家が、その議論を引き起こした時代と社会の底流にある言葉にならない世界をマンガという方法により表現したもの、といえないでしょうか。この意味で、私は、「エロスの解放者」という評価は、初期の『ハレンチ学園』に当てはまらないのみでなく、永井豪という作家に対して貼るべきラベルでもないと考えます。

誤解を恐れずにいえば、解放を欲したのは永井さんではなく読者の子どもたち自身。永井さんはその子どもたちの思いを表現したにすぎないわけです。さらに、逆説的ですが、集英社に抗議文を送り、『ハレンチ学園』を禁書にした人たちこそ、永井豪という作家の創作意欲をかきたてることにより、性の解放を促した張本人といえないでしょうか。

歴史に「もし」という仮定はタブーといわれますが、あえて「もし」『ハレンチ学園』を巡る騒動が沸き起こっていなかったなら、現在、「エロスの解放者」と評価される永井さんの一連の作品は、生まれなかったかもしれないと考えますが、いかがでしょうか。

もちろん、このことは永井豪という作家の力量を疑うのでもなければ、彼の作品が果たした役割を否定するものでもありません。彼の力量と作品の評価は、「エロスの解放者」という表面的なラベルを貼りつけることで終わってはならないということです。

永井豪という一人の小宇宙を媒介にして、その時代と社会の底流に流れる隠された世界を、誰の目にも理解可能なように表現できる力量。それも、才気のみでなく、該博な知識を駆使する能力とセットで表現できる数少ない作家。これが私の永井豪というマンガ家に対する評価です。

もう一つの可能性を求めて

もう一つ「もし」という視点から、『ハレンチ学園』の価値を問いなおしてみたいと思います。それは、「学校の先生の本性」を暴くという、永井さんの本来の意図が評価されてい

れば、ということですが。

『ハレンチ学園』が生まれた一九七〇年代半ばに、日本の高校・大学の進学率はピークに達し、受験戦争が激化します。そして、同年令の九割以上進学する高校において不本意就学者が問題視されるようになります。また、八〇年代に入って、全国の中学校で校内暴力の嵐が吹き荒れます。

このような変化に対して、学校と教師は、画一的な教育と管理を強化することによって対処せざるをえませんでした。しかしその結果、八〇年代半ばに、学校は秩序を回復したものの、画一的な学校的世界に閉ざされた子どもたちの間に、さまざまな人間関係の軋轢（あつれき）に起因する問題が頻発するようになりました。さらに、八〇年代末に至って、学校に通うこと自体に精神的に耐えられない子ども（不登校児）の増加が明白になりました。このことを契機に、文部省は、問題は子どもではなく学校にあることを認め、従来の画一的な学校教育のあり方を根本的に改める施策を次々と提示することになります。

私は、今回、『ハレンチ学園』を読み返してみても、このような七〇年代から八〇年代にかけて、学校の拡大とかかわって生じる子どもたちの世界の変化（過度の学校化社会の問題）を、永井さんが見事に先取りして表現していることに驚きました。それも、教育者や研究者の視点ではなく、子どもの視点から描かれています。

加えて、より感動したのは、永井さんの筆先は、一方的に学校や教師を攻撃することのみでは終わっていないことです。永井さんにとって、加害者であるはずの教師もまた、生活のために頑張る愛すべき人たちであるわけです。そして、彼らもまた、子どもたちと同様に、学校という社会が、それは現代社会の縮図でもあります。強制する管理の呪縛（じゆわく）に陥っていることを、ギャグマンガとしてデフォルメされているものの、非常に鋭く描かれていることを発見しました。

このことに関して、少年ジャンプ創刊時のスタッフであった西村繁男^{にしむらしげお}さんは、従来のマンガには、「作者が一方的に感動や笑いを読者に発信」することにより、「大人なり年長者なりの道徳観なり、倫理観の押しつけが無意識に存在」していたのに対して、永井さんの『ハレンチ学園』の価値は、「読者の視点、子どもの視点から、大人の倫理の殻を破った」ことにあるとして、次のように述べています。

「スカートまくりに象徴される異性への関心なり、好奇心は、子どもが健康に育っている証明である。それを自ら律して隠蔽しているのは、大人の倫理に従ったことである。親も教師も子どもは親や教師の言うことを聞く、大人にとって都合の良い子であることを望んでいる。

親も教師も自分で選択できぬ子どもにとっては、まことに迷惑なことであった。子どもの

健康な成長を、大人の都合、大人の狡さ、大人の欺瞞性で倫理の籐（たが）をはめ、阻害しているのではないか。」（西村繁男『さらば わが青春の「少年ジャンプ」』飛鳥新社）

そして、西村さんは、「永井の『ハレンチ学園』によって痛烈に告発されたのは、教師や親の欺瞞性であった」と結論づける一方で、「教師といえども人間であり、一皮むけば生徒と対等である。欲望の面では、生徒と真っ正面からぶつかる教師像は、戯画化されているとはいえ、ある意味では人間味あふれるものであった」と、永井さんの『ハレンチ学園』のもう一つの側面を評価することも忘れてはいません。

さすがに、八〇年代半ば、少年ジャンプ四五〇万部を達成させた名編集長の目です。永井さんの世界の本質を鋭く指摘しています。

“もし”この「教師や親の欺瞞性の告発」と「生徒と真っ正面からぶつかる人間味あふれる教師像」という二つの側面が、「エロスの解放者」というラベルに代わって評価されていたならば、永井さんのその後の作品はどのようなものになっていたでしょうか。少なくとも、『ハレンチ学園』の内容は、七〇年代後半から八〇年代にかけて生じる子どもの世界の変化への警鐘となったことは間違いないと考えます。

しかし、残念ながら、このような側面は無視され、「エロスの解放者」という側面のみが過大に評価されることになります。これが、私が『ハレンチ学園』に対する従来の評価に対

して疑問をもった理由です。

もっとも、永井さんの豊かな才能を、このような一方的なラベルによって抑え込むことはできませんでした。それが、『鬼』、『魔王ダンテ』、『デビルマン』、『バイオレンスジャック』といった作品を次々と描く硬派の「SFマンガ作家」永井豪の誕生です。ただし、それは『ハレンチ学園』の作者と異なる永井豪の作品という意味ではないことは、あえていうまでもないことです。

新たな時代と社会へのメッセージ

「僕にとっては『ハレンチ学園』の世界も実相であり、『神曲』の世界も同じように実相なんです。」（本書一九一ページ）

これは、『ハレンチ学園』も『デビルマン』も『ダンテ神曲』も、すべてマンガ作家永井豪の世界の表現である、ということの意味するのだと考えます。では永井さんが考える「実相」とはどのような世界でしょうか。

私見ですが、『ダンテ神曲』に描かれた世界こそ、さまざまに貼られてきたラベルを越え

て、作家永井豪がデビュー以来、抱き続けてきた「彼自身の世界」を、全魂を込めて「表出」した作品と考えます。ただし、それは、永井さん自身が否定しているように、『ダンテ神曲』が「本物（実相）」の永井豪であって、『ハレンチ学園』は新人作家を売るための「仮の姿（虚相）」ということではありません。

では、人間の悪を裁く地獄という聖なる世界を描いた『ダンテ神曲』と、学校、親、性という、最も世俗的な世界を描いた『ハレンチ学園』を結ぶものは何でしょうか。

そのヒントは、彼のSFマンガの中にあると考えます。

彼がSFの手法を用いて表現したマンガの世界には、いずれも旧来の価値基準の逆転もしくは相対化が、ストーリー展開とは別次元の旋律として流れています。たとえば、『マジンガーZ』では、科学の成果である巨大ロボットが、操縦方法によっては、破壊と殺戮の兵器になること、いいかえれば科学的世界とその価値に対する疑問視や相対化の視点を読み取ることができるはずです。また、神と悪魔の関係を逆転させることから生まれたのが、『魔王ダンテ』の世界です。さらにそれを引き継いだ『デビルマン』では、より複雑で深刻な問題が提起されています。デビルマンを追い詰め、彼の最後の拠り所であった恋人の命を奪ったのは、彼が戦闘を挑むデーモンではなく、彼がデーモンから命をかけて守ろうとした人間たちであったからです。

高取英^{たかとりえい}さんは、このような永井さんが創造したデビルマンと鉄腕アトムを比較することから、ヒューマニズムを背負ったヒーローとしてのアトムに対して、「ヒューマニズムを破壊するニヒリズム」を持った「悪のイメージを重ね合わせた」ヒーローとして、デビルマンを位置づけています。（高取英他著『マンガ伝』平凡社）

私は、このニヒリズムや悪のヒーローという指摘を認めつつも、そのことは、人間への不信ではなく、永井さんの人間をみつめる優しさの表現だと考えます。理由は、ダンテの『神曲』に対する永井さんのアンビバレンツな思いです。

これまで描いてきた多様な作品世界の背後に、幼いころに繰り返し読んだ子供文庫『ダンテの神曲物語』に描かれた天国や地獄のイメージが一貫してあることを、永井さんは、さまざまな機会において話されています。しかし、それほど、のめりこんでいるダンテの世界にもかかわらず、同意できない部分があることを、『ダンテ神曲 地獄編 上』の後書きで、次のように述べています。

「原作の中に、私には納得できないシーンが多く出てきた。一番苦しかったのは、ダンテがキリスト教以外の宗教を、一方的に「悪」と決めつけていることであった。

そこはそのまま、原作に忠実に描きながらも、実は作者（私）の心情が、ダンテに批判的なことが、読者の方々にわかるように描いたつもりである」

永井さんは、このようにキリスト教以外を認めないダンテに対する違和感の理由として、自分が日本人だから、という説明をしています。しかし、多分、それだけではないでしょう。私は、永井豪という人格とその価値観を構成する要素の最も重要な部分に、一方的に権威を強制することへの嫌悪感と、逆に、どんな罪を犯した者であっても、彼や彼女たちを一方的に裁く権利は誰にもない、という信念のようなものがあると思います。

科学も、ヒューマニズムも、キリスト教も、さらには学校も、教師も、親も、それがいかに正しいといわれていても、権威や権力となつて人間を裁き手段視する場合には、永井さんは、意義申し立ての筆をふるわざるをえなかったのではないのでしょうか。そして、そのような永井さんの創造力を支えているのが、ハレンチ学園の先生がそうであったように、人はどのような場合にあつても、懸命に生きている、という、永井さんの人間への限らない愛情と優しさであると考えます。

さらに、このような永井さんの内面を構成する要素と、時代と社会の底流を流れる言葉にならない人々の意識を表現しようとする彼の創作方法が、渾然一体こんぜんいつたとなることにより、彼の当初の意図を越えて、時代と社会の潜在的なエネルギーとその向かう方向を示唆する作品を創造しつづけてきたと考えます。

もちろん、このことは、何か別の力が永井さんに乗り移って描かせた、という意味ではありません。永井さん自身は、本書にもあるように、そのように表現する場合があります。しかし、それは永井さんの他に類をみないマンガ家としての才能、すなわち意識の範囲を越えて、潜在的な無意識の世界を描くマンガ作家永井豪の才能を証明する言葉として理解したいと思います。

その意味で、『ハレンチ学園』において学校化社会の課題を先取りし、神と悪魔の関係を逆転させ、科学とヒューマニズムへの安易な信頼感に警鐘をならしてきた永井豪さんは、今新たに、『闇の宴』や『ダンテ神曲』によつて、何を私たちに示そうとしているのでしょうか。私は、新たな世紀を迎えるに当たり、科学とイデオロギーに枠付けられた二十世紀の価値の世界が崩壊した今、改めて、人間の「闇」を視野に含めた、「聖と俗の関係」を再構築するための課題を提起する書だと考えます。

しかし、その本当の答えは、『ハレンチ学園』がそうであったように、二十一世紀の時代と社会をまたなければならぬのかもしれないかもしれません。

これが永井さんへの尊称の意を込めて、本稿の題名を「近未来の表現者」とした理由であることを、最後に述べておきたいと思います。

「谷川彰英」編

矢口 高雄

マンガは

時代を映す

永井 豪

里中満智子

冒険という未知への挑戦

谷川彰英

9

「環境」と「愛」と「宇宙」と

自分の世界を描き続ける

矢口高雄

15

三十歳の新人漫画家

リアルな釣り漫画を描きたい

「少年マガジン」で水を得た魚

『カムイ伝』が漫画家へと押し出した

だれも知らなかった江戸の釣りバカ殿様

活字から漫画になった「少年時代」

ドラマを創る

漫画の腕力とは――

不健全な肉体に宿る精神

ボクの友だちは山と川

谷川彰英

62

手塚治虫から白土三平へ

「釣り」は自然との語らい

エッセイマンガの迫力

オーイ!! 友だち

まんがとわたし

里中満智子

83

漫画との出会い

「漫画家になります」

「男」と「女」って?

私が歴史を好きな理由

これからの「まんがとわたし」

主張する恋愛詩人

石子 順

128

里中満智子漫画の特徴

愛するために生きる

考えるために生きる

マンガは時代を映す

永井 豪

155

僕のマンガの描き方

『ハレンチ学園』がなぜ生まれたか？

エロチシズムをどう描く？

マンガは時代を映す

子供は未来を予感する

今後の仕事、そして将来

近未来の表現者

馬居政幸

196

二つの評価

教師の本性を暴く

十兵衛のスカートをまくらせたのは誰か

もう一つの可能性を求めて

新たな時代と社会へのメッセージ

三人のMANGA文化発進人

阿部 進

218

―里中・矢口・永井にふれて―

愛ひとすじ 里中満智子さん

まだまだ続く「山と川」 矢口高雄さん

時代を変えた 永井 豪さん